

令和5年度 鳥取大学入学者選抜試験問題

(総合型選抜)

小 論 文

(地域学部 地域学科 人間形成コース)

(注 意)

1. 問題冊子は、指示があるまで開かないこと。
2. 問題は4ページ、解答用紙は3枚、下書用紙は3枚である。
指示があってから確認すること。
3. 解答は解答用紙(横書き)に記入すること。
4. 下書、メモ等を試みる場合は、下書用紙又は問題冊子の余白を利用してよい。
5. 解答用紙を持ち帰ってはならないが、問題冊子及び下書用紙は必ず持ち帰ること。

問題 I 次の英文はカナダにおける野外教育 (outdoor education) について論じた文章である。文章を読んで問 1、問 2 に答えなさい。

① There is a growing interest across Canada in outdoor education that is formally integrated into school. This trend has increased since COVID-19, particularly because open-air environments significantly reduced the risks of disease transmission.

Outdoor education is an umbrella term that includes many approaches and settings. Practitioners of outdoor education may be involved in what they see as nature-based education, place-based learning, forest schools, environmental education or experiential learning. Especially with younger children, outdoor education can be play-based, using movable parts that are open-ended like buckets or blocks — what educators call “loose parts.”

Outdoor education can happen in green spaces, on playgrounds, on school grounds, a nearby natural environment, garden or any other accessible place in the community.

While the idea that outdoor education can be beneficial to children’s learning and development has been shared by practitioners in formal education systems for generations, in recent decades research has documented ② multiple benefits from cognitive, physical, psychological and social perspectives.

At the cognitive level, outdoor education has the potential to improve how children retain learning and to increase students’ ability to transfer their learning to everyday situations. Even brief contact with nature can have positive effects on cognitive performance.

On the physical level, outdoor education reduces sedentary behavior.

Health research also shows that contact with nature reduces blood pressure and the risks associated with myopia.

From a psychological perspective, learning in contact with nature is known to reduce anxiety and increase people’s overall sense of well-being. Immersion in nature can even increase feelings of self-efficacy and self-esteem.

In terms of social outcomes, outdoor education develops social relationships between students and provides additional opportunities for collaboration among them.

Outdoor practices in school settings also provide equal opportunities for all youth to experience nature and outdoor environments in the community.

注

transmission : 伝染, umbrella term : 総称, movable : 動かせる, sedentary : 座りっぱなしの, myopia : 近視, immersion : 没頭, self-efficacy : 自己効力感, self-esteem : 自尊心

出典

Ayotte-Beaudet, J. P., & Berrigan, F. (2022) . *Outdoor education has psychological, cognitive and physical health benefits for children*. The Conversation.

<https://theconversation.com/outdoor-education-has-psychological-cognitive-and-physical-health-benefits-for-children-183763> (最終閲覧日 : 2022 年 8 月 24 日)

(但し、本文中の小見出しは省略した。)

問 1 下線部①を和訳しなさい。

問 2 下線部②の具体的な内容を 200 字以内の日本語で説明しなさい。

問題Ⅱ 次の文章を読んで、問1、問2に答えなさい。

フェミニズムの本を売る理由

「マジョリティ」を社会学者のケイン樹里安さんは「多数派」ではなく、「(差別などの問題があった時に) 気付かずにいられる人/気にしないでいられる人」と訳す。

社会学者の上原健太郎さんとともに編著者として名前を連ねる『ふれる社会学』(北樹出版)で、ケインさんは「気づかず・知らず・みずからは傷つかずにすませられることこそ、マジョリティ(多数派)のもつ特権」と書いている。

半世紀以上にわたって、僕は(1) マジョリティとして生きてきた。

長男として生まれ、旧制中学の伝統を引き継ぐ進学校から国立大学に進み、当時は難関だったマスコミに職を得て定年近くまで30年以上、正社員として働いた。出会いにも恵まれたが、自分の力で道を切り開いてきたと思っていた。

大学卒業後に入った会社(読売新聞大阪本社)の新聞記者の同期二十数人は全員男性だった。女性がひとりもないことに疑問を抱かなかつた。惜しくも合格しなかったのか。合格ラインに達していながら「男優先」で落とされたのか。そもそも受験の機会を与えられていたのか。彼女たちが同じスタートラインに立っていたとしたら、僕は違う人生を歩んでいたかもしれない。

新聞記者になってからは、人と違うこと、人がやらないことを目指した。みんなが右に行くなら、僕は左の道を選んだ。「少数派」になることを恐れないと言いながら、まぎれもなく「マジョリティ」の一員だった。

自分が生きてきた社会が「性差別」に満ちていることに気づかず、知らずにいた。男という名の下駄を履いていたことに気づいたのは58歳で本屋を始めてからだ。

2019年10月の刊行記念トークイベント「女性史はオモシロい」に備えて、『ウーマン・イン・バトル』(マルタ・ブレーン著、イエニー・ヨルダル絵、椛谷玲子訳、合同出版)を手を取った。女性たちによる女性たちのための150年の闘いを描いたコミックで、「自由・平等・シスターフッド!」の副題がつけられている。

日本の女性参政権(女性が選挙に出たり、投票したりする権利)の獲得は1945年の敗戦後であることは知っていた。だが、奴隷制廃止をめぐる始まった南北戦争の結果、黒人の男性は参政権を得たにもかかわらず女性は閉め出されたままだったこと、フランス革命によって起草された憲法「人間と市民の権利の宣言」の中に女性は含まれていなかったことなど、ノルウェー発のカラフルなこの本を読むまで知らなかった。

闘いの中で多くの女性が命を落とした。性別によって自由や行動を制限されない社会の実現を目指して、勇気を出して一步を踏み出す人たちがいた。女性が男性と同じだけの権利を得るべきだと考える人たちを、この本は「フェミニスト」と定義している。

再読した。ドイツの哲学者にして革命家でもあるローザ・ルクセンブルクは「行動しない人間は、自分が鎖につながれていることすら気づかない」という言葉を残している。彼女が

共産主義平和運動の末に逮捕され、銃殺されたことを知れば、重い。

開店した当初は 1 冊もなかったフェミニズムやジェンダーの本は増え続けている。今や最多のジャンルになっている。さまざまな出版社から刊行されていて仕入れが追いつかない。DIY で専用の棚を作ったが、収まり切らず、他の棚を侵食している。

ある取材で女性のライターからフェミニズムとジェンダー関連の本が多い理由を聞かれ、「(2) 知らないことをもっと知りたいから」と答えた。平等であるべき雇用や教育などで格差をつけられ、性暴力に対する恐怖と不安を抱えて日々暮らさなければならない女性たちがすぐそばにいるにもかかわらず、想像したことがなかったという負い目もある。

社会には僕がまだ気づかず、知らずにいることがある。だからフェミニズムやジェンダーをテーマにした本を探しては仕入れて棚に並べ続ける。

出典：落合博『新聞記者、本屋になる』光文社、2021年、170-173頁。

(但し本文中のルビは省略した。)

問1 下線部(1)「マジョリティとして生きてきた」とはどういうことか。筆者がこの言葉に込めた意味を踏まえて、50字以内で説明しなさい。

問2 下線部(2)「知らないことをもっと知りたいから」とあるが、現時点のあなたにとって「知らないこと」とはどんなことか。筆者のいう意味を踏まえて、800字以内で論じなさい。